

天理市埋蔵文化財調査概報

(平成4年度・国庫補助調査)

長寺遺跡 (第7・8次)
平等坊・岩室遺跡 (第10次)

1993

天理市教育委員会

序 文

本市における埋蔵文化財行政は、遺跡の発掘調査事業が主体となり、その規模、件数も増加の一途をたどっています。ここには、文化財の保護と開発という二律背反する宿命があります。しかし、地下深く埋没していた遺跡であっても、重要な意義のあるものは開発側と協議して保存して行かなくてはならないと言えます。

本概要報告は、平成4年度におきまして天理市教育委員会が実施した櫛本町の長寺遺跡と平等坊町の平等坊・岩室遺跡の国庫補助事業による調査の報告であります。

これらは事前調査のため十分な調査が実施されたとは言い難いですが、調査の積み重ねによって、本市の歴史が解明されていくことを望むものであります。

最後に、発掘調査の開始から終始ご助言をいただいた奈良県教育委員会、榎原考古学研究所、埋蔵文化財天理教調査団を始め、関係各位に深く感謝申し上げます。

平成5年3月31日

天理市教育委員会

教育長 金澤 運

例 言

1. 本概報は、天理市教育委員会が平成4年度に実施した埋蔵文化財調査のうち、国庫補助事業として発掘調査をおこなった長寺遺跡（第7・8次）、平等坊・岩室遺跡（第10次）調査の概要報告である。
2. 発掘調査は、長寺遺跡を松本洋明、平等坊・岩室遺跡を青木勘時が担当し、調査補助・遺物整理・本書作成にいたっては下記の方々の協力を得た。
名倉 聡（花園大学） 市村慎太郎（奈良大学） 和田 和（奈良大学）
大嶋 和則（奈良大学） 前田 雪恵（奈良大学） 西山 陽子（堺女子短期大学OB）
3. 本概報の執筆は調査担当者が分担し、執筆者名は目次と一部文中に示した。
また編集は松本洋明がおこなった。

目 次

長寺遺跡（第7・8次調査）

I はじめに	（松本）	1
II 第7・8次調査の概要		
(1) 地形と基本土層	（松本）	2
(2) 弥生時代の遺構と遺物	（松本）	5
(3) 古墳時代の遺構と遺物	（松本・名倉）	12
(4) 奈良～平安時代の遺構と遺物	（松本）	16
III まとめ	（松本）	18

平等坊・岩室遺跡（第10次調査）

I はじめに	（青木）	19
II 調査の概要		
1. 層序	（青木）	20
2. 検出遺構	（青木）	23
3. 出土遺物	（青木）	25
III まとめ	（青木）	26

長 寺 遺 跡
(第7・8次調査)

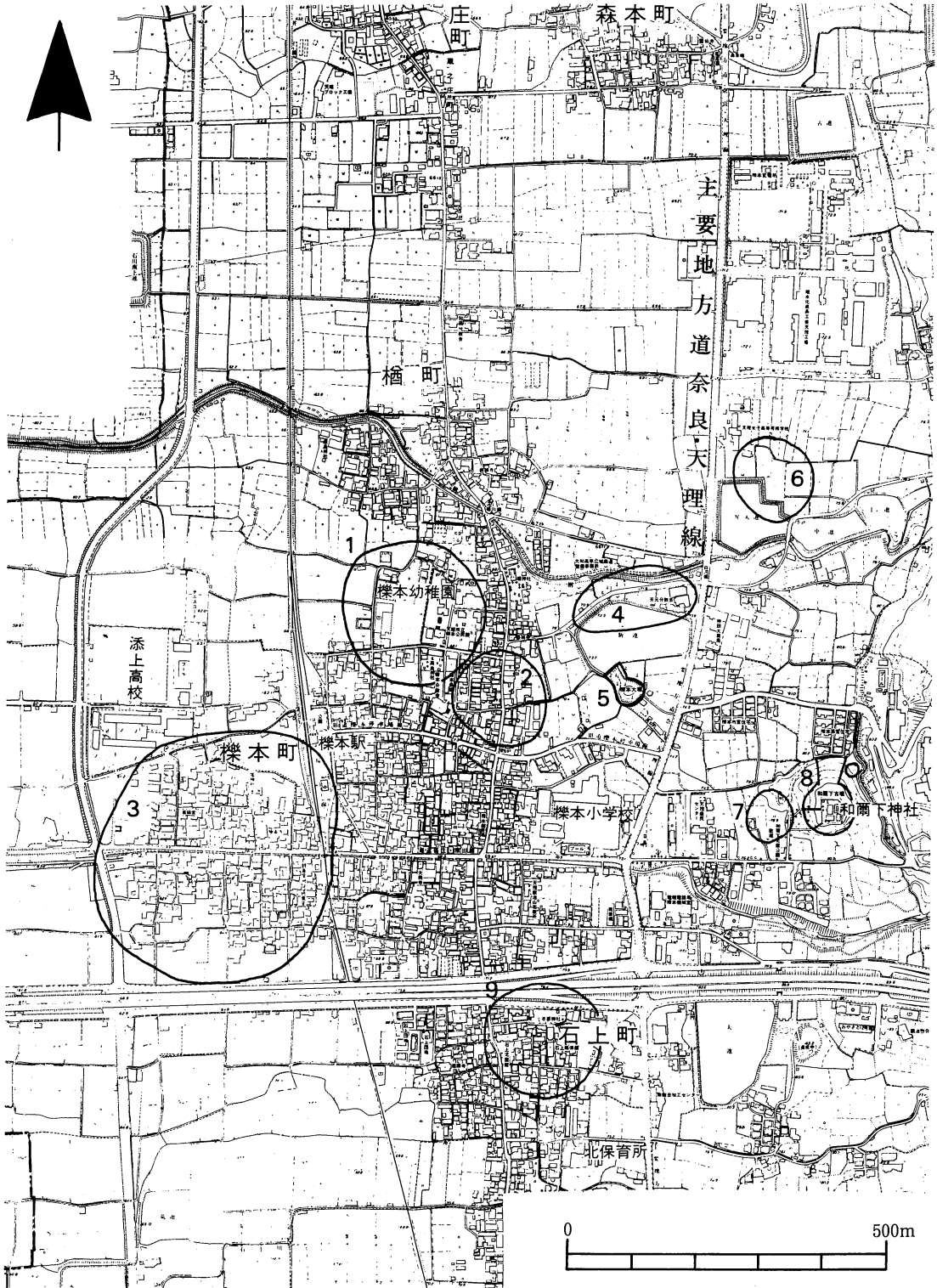


図1 長寺遺跡の周辺 (S 1/10000)

1. 長寺遺跡 (廃寺)
2. 散布地 (弥生)
3. 榎荘中世集落
4. 散布地
5. 榎本墓山古墳
6. 榎池廃寺
7. 柿本廃寺
8. 和爾下神社古墳
9. 在原廃寺

I はじめに

天理市の北部、櫛本町に所在する長寺遺跡は高良神社の境内を推定地とする長寺廃寺の検出を目的に遺跡の範囲を検討していた。ところが同遺跡の調査が進むにつれて長寺廃寺に関する遺構だけでなく、おびただしい弥生時代の遺構や古墳時代中期を主体とする古墳群の存在まで明らかとなり、遺跡のもつ性格や内容、規模や範囲を検討しなおす必要性が起きている。たとえば弥生時代の遺構については大和第IV様式を主体に、いわゆる中期後半の集落跡であることが判明しつつある。中期後半になると大和では弥生集落に環濠が発達する段階で、長寺遺跡の弥生集落においても当然のことながら環濠の有無とその所在を確認することが遺跡の範囲を検討するうえでの課題といえる。また古墳の存在を示す遺構についても同遺跡だけにとどまらず地形に沿う形で広がっていることが現状から推測され、むしろ東大寺山古墳群との関わりから古墳の所在を求めていく必要がある。第7・8次調査は平成4年6月8日～9月9日まで実施した。

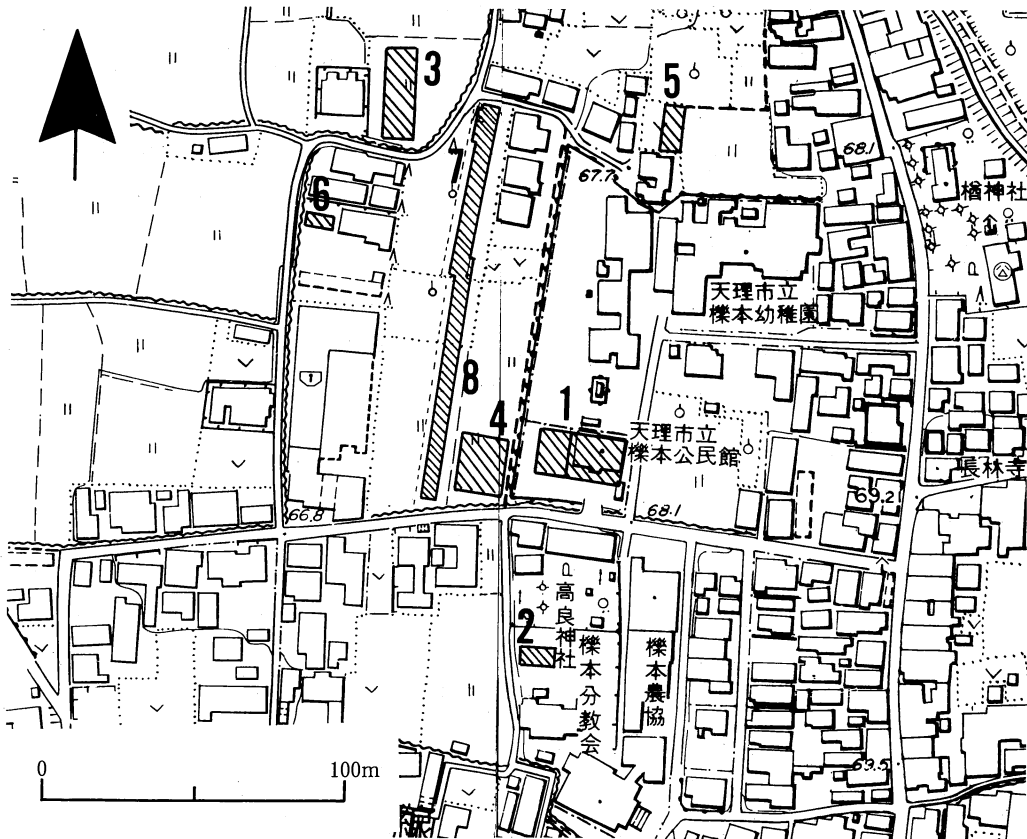


図1 長寺遺跡の調査地点 (S 1/2500) 1~6 調査次数

II 第7・8次調査の概要

(1) 地形と基本土層

第7次調査地点と第8次調査地点は南北に隣接し合っているため、土地所有者の協力から両地点をつなげる形で南北におよそ130m、幅4mにわたって調査区を設定し発掘を実施した。

1) 第7次調査区(図3・A~D) 調査地点の現状は標高66.4mの水田で、第8次調査地点の標高66.8mに比べて土地が低くなっている。調査では第7次調査区の中央部で谷筋状の落ち込みを検出し、同地点から第8次調査地点に向かって地形が高くなだらかな台地になっていることが判明した。谷筋の規模は谷底が標高64.5mまで落ち込み現在の水田からおよそ2m下がり、幅は南北およそ30mにわたって落ち込みを形成している。そのため第7次調査区の半分以上が谷筋形にともなう落ち込みになり、1.5mにもおよぶ包含層の堆積をみた。特に谷筋地形の中央部では幅4~5mで急激な落ち込みを形成し、砂層を主体とする弥生時代から古墳時代にかけての堆積があり(図3・B-9~11層)、自然流路を形成していた様子である。長寺廃寺が創建された奈良時代から平安・鎌倉時代にかけて谷筋地形にともなう落ち込みが明瞭に残っていた様子であるが、平安時代後期以降は耕作地として利用されたらしく地形に従う状態で素掘り溝遺構が層位をなしている(図3・B-5~7層)。現在のような地形に変わったのは近世以降と推測され、水田開発を契機に平坦な地形へ展開していることが考えられる。

2) 第8次調査区(図3・E~F) 第7次調査区に比べておよそ40cmほど現状の水田が高い。地山も標高64.5mまで落ち込んだ第7次調査区の谷筋地形に比べて、標高66.5mで地山を検出し(図3・F)北から南に向かって地形が高くなっている。特に長寺1号墳を検出した調査区の南端ではすでに耕作による削平から包含層が残っておらず、地山を現状の水田面から30cm掘り下げた浅い位置で検出している。本来の地形はさらに高くなっていたものと推測される。ところで昭和63年度に実施した第3次調査では第7次調査区で検出した谷筋の北側を形成する台地を調査していたことに

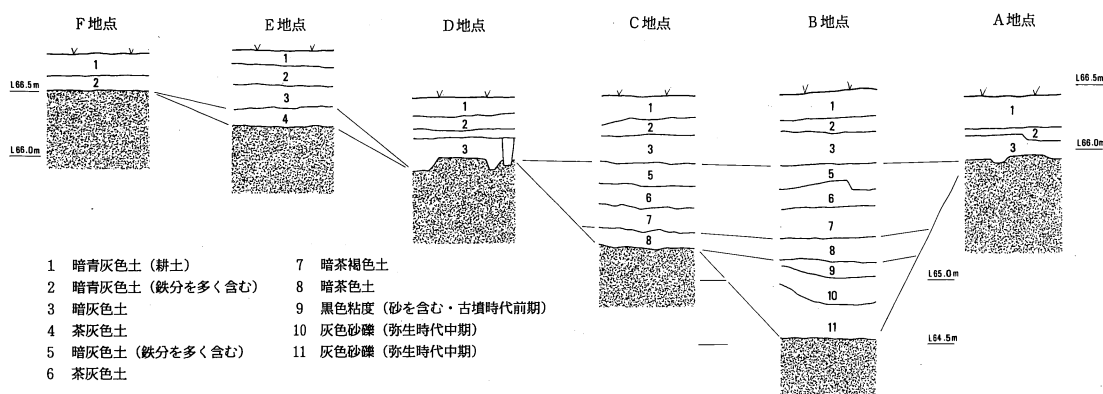


図3 基本土層図 (S 1/60)

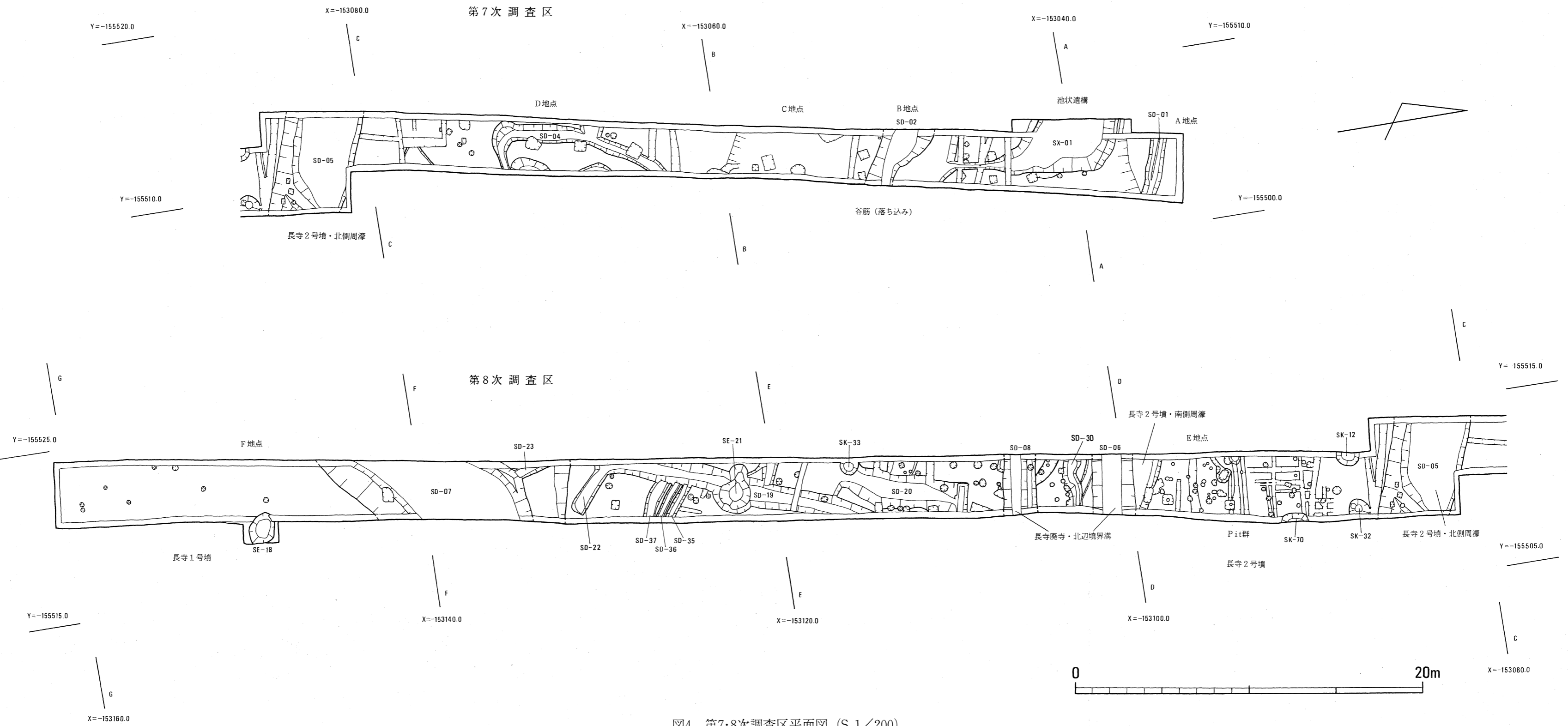


図4. 第7・8次調査区平面図 (S 1/200)

なり、おびただしい弥生時代の遺構を検出している。よって弥生時代から中世にかけて長寺遺跡は東大寺山からのびる台地地形の先端に位置し、なだらかな起伏のある台地に立地していたことが確認された。

(2) 弥生時代の遺構と遺物

1) SD-01 (自然流路)

第7次調査区の北半部で検出した自然地形による谷筋状の遺構である。落ち込みの幅は24mあり、緩やかな傾斜を伴いながらも中心部分では幅5m、深さ2mの深みを形成した自然流路である。深みの下層は弥生時代中期後半(大和第IV様式)の土器片を包含した砂層を主体とする堆積があり、同時期にかけて比較的流水のあった谷筋の存在が推測される。深みの上層部には古墳時代前期(布留式土器片を含む)の砂層堆積がある。自然流路にともなう砂層堆積は弥生時代中期後半と古墳時代前期に限られ、その間、弥生時代後期の包含層は認められない。また古墳時代以降、流水がなくなり深みも埋没し緩やかな落ち込みだけとなる。平安時代後期まで落ち込みの起伏が認められる。落ち込みにともなって出土した弥生土器片の出土量は比較的多いが細片が目立つ。1点であるが深みの下層上部から弥生時代中期末～後期初頭(大和第V様式)の高坏が出土している。長寺遺跡から出土した弥生土器の中では、今の所、最も新しい時期の資料である。

2) pit群(住居跡)

第8次調査区の北半部、長寺2号墳の下層から検出した柱穴状の遺構が集中する所である。竪穴式住居にともなう溝状の遺構や床面を思わせる痕跡は認められなかったが、pitから炭化物が目立ち炉跡と推測される痕跡があり、同遺構を中心に円形住居の存在が考えられる。pit群の北よりには土坑(SK-12・32)、南にはSD-30溝が住居に近接していたものと思われる。平均して土器の出土は破片に限られ量も少ないが、SD-30からは中期後半(大和第IV様式)の土器が多量に出土している。中期後半の住居跡である可能性を指摘しておきたい。

3) SE-18(井戸)

第8次調査区の南部、長寺1号墳、墳丘部分から検出した中期後半の井戸遺構である。上面が径1.9m×1.5mの楕円形、下面が径0.7mのやや四角形に近い井戸底、深さ2.4mで内部に枠をもたない素堀りの井戸である。井戸の上層(図5-1～2層)はSE-21の場合と同様に茶色系の土壌からなり、おびただしい細かな土器片が多量に出土している。井戸の廃絶後、廃棄土坑として利用されている。暗青灰色系の粘土層が堆積する井戸の下層では、下層の上半部(図5-5層)から完形の水差形土器(図7-4)1点を含む、比較的形態の明らかな土器片が目立つ。井戸の底には人頭大の扁平な石が3点出土している。井戸の南側壁面が高さ1m、幅80cm、奥行き30～40cmにわたって崩落している。ところが井戸の下層部には壁面の崩れを示す土壌堆積がなく、崩壊土を再掘削して井戸の機能を回復させていた可能性がある。井戸底から出土した石は復旧に際して持ち込まれた足場石であったことが推測される。

土器は大和第四様式・前半にあたる資料が出土している。層位的に時期差を求めることが難しく、いずれも一括資料で扱えないが後述するSE-21の資料と比較できる。特に第四様式・前半の特徴を示すと、短頸壺の頸部に櫛描列点文を施す(図8-20)。高坏の脚部裾に施すスカシ穴を穿つものが見られない。文様では簾状文の際立つ広口壺や無頸壺が出土している。

4) SE-21 (井戸)

第8次調査区の中央部で検出した中期後半の井戸遺構である。上面が径2.9m×2.2mの楕円形、底面が径0.6mの円形、深さ2mの段状に落ち込み、内部に杵をもたない素堀り井戸である。下層部は湧水が活発である。井戸の上層(図5-3層)は古墳時代後期のSD-19溝に切られ攪乱を受けている。同層から廃棄にともなうおびただしい土器片が出土し、井戸の廃絶後は径2m前後、深さ60cmほどのゴミ捨て場に転じている。土製の勾玉1点が出土している(図6)。黒粘土層が堆積する下層では底面に近い下半部から広口壺(図9-1)、水差形土器(図9-3)、各1点が完形で、投棄の際に打ち欠いた短頸壺(図9-2)1点が重なって出土している。下層の上半部(図5-7~8)は上層

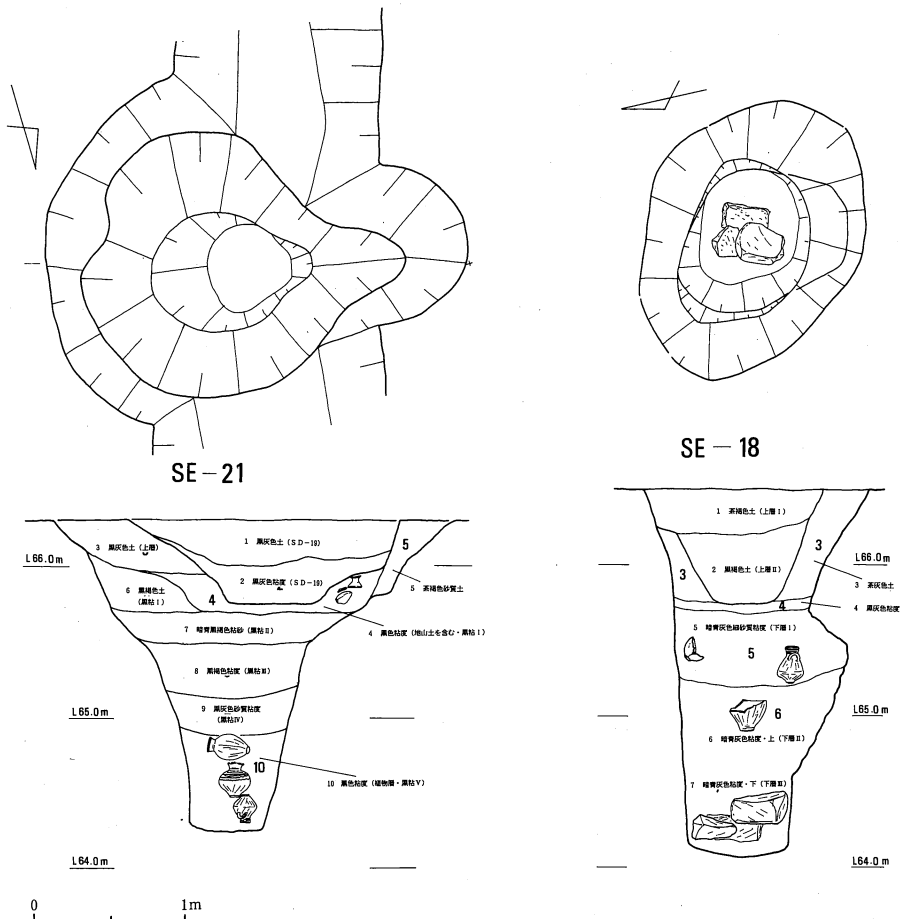


図5 弥生時代の井戸遺構図(S1/50)

に比べて土器の出土量が少ない。しかし細かい破片が目立つ上層に対して実測可能な土器片が比較的目立つ。完形土器が出土した下半部では破片が非常に少ない。遺構の平面形態は西面に突出した楕円形プランで、検証できなかったが突出部には梯子を立てていた可能性がある。

土器はSE-18に比べて大和第IV様式・後半の資料が出土している。同一遺構で層的に時期差を求めることができない。第IV様式・後半の特徴

を示すと、短頸壺に施す凹線文が発達し頸部に施していた櫛描列点文が凹線文(図9-2)に変わり、中には無文のもの(図9-4)もある。高坏の脚部裾にスカシ穴を穿つものが一般的になりSE-18と比べて違いが歴然としている。しかし器種や形態の違いからSE-18と21とで差を見いだすのが難しい。櫛描文だけで仕上げている広口壺と無頸壺(図9-1・5)が各1点出土している。いずれも胎土や櫛描文の特徴が大和のものと異なり、東方からの搬入品と推測される。

5) 溝

第8次調査区の中央部、SE-21の南側で3条に並ぶSD-35・36・37を検出している。幅50～80cm、出土した遺物は少ないが大和第IV様式の土器が出土している。pit群を検出した南側で東西方向に延びるSD-30を検出している。幅80cm、深さ30cmの規模の小さい溝であるが、遺構内から多量の大和第IV様式の土器が出土している。溝の性格はいずれも定かでないが、規模の小さい水路に限られる。大溝は出土していない。

6) その他

第7次調査区から第8次調査区にかけて広範囲にわたり弥生時代の遺構を検出した。ところで第8次調査区の南端付近は地形的に高く、良好な基盤層を検出している。しかし調査では現在の水田によって激しく削平を受けたことが推測され、弥生時代の遺構が僅かに出土しているだけである。SE-18井戸が同地点から出土しており、本来は弥生時代の遺構が集中していたものと推測される。

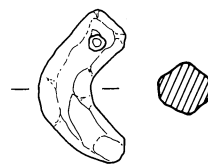
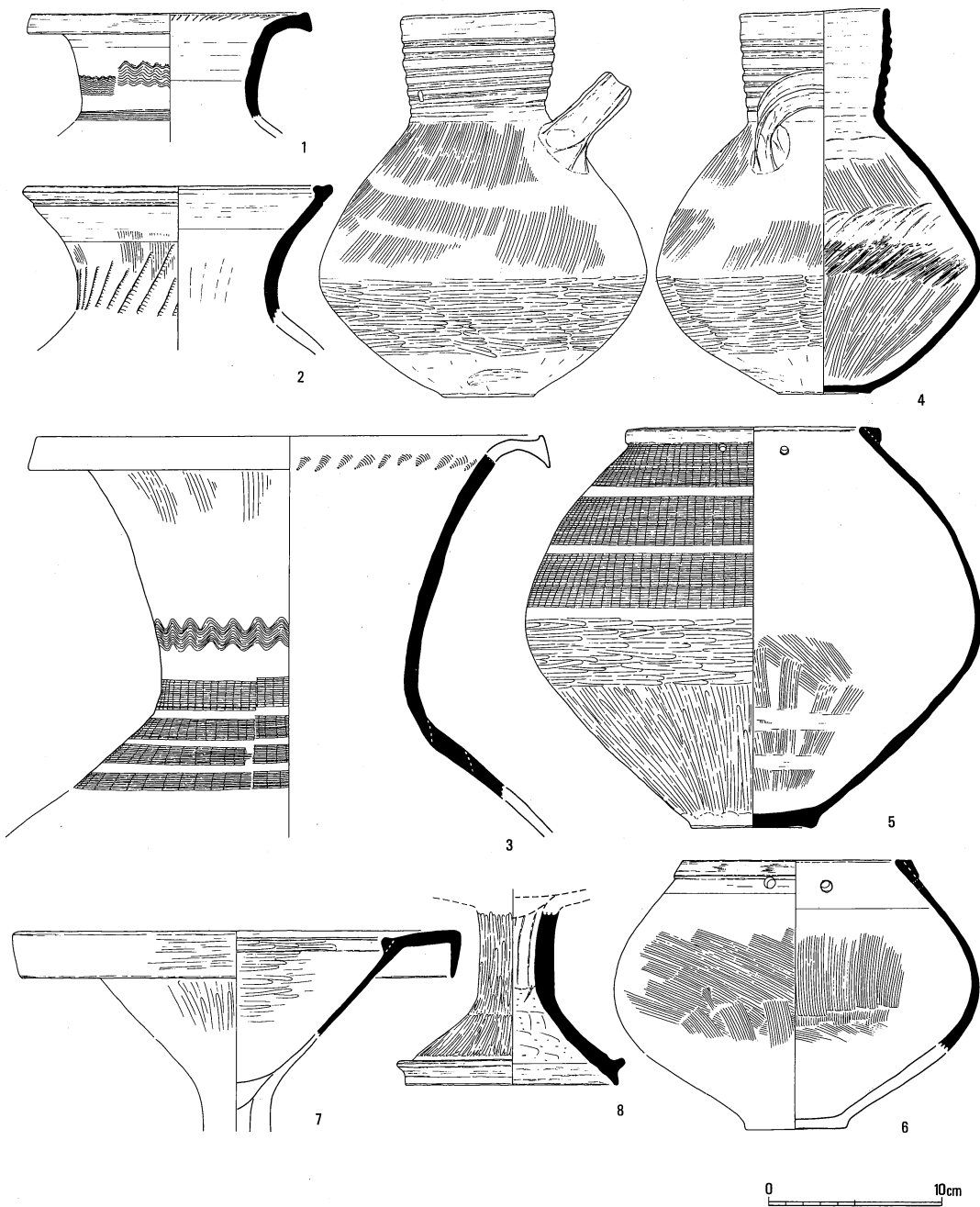


図6 土製勾玉



- 上層 I 20
 下層 I 4, 5, 9, 10, 12, 15
 下層 II 1, 2, 3, 6, 11, 13, 14, 16, 17, 18
 下層 III 7, 8, 19

图7 井戸SE-18出土土器(S1/4)

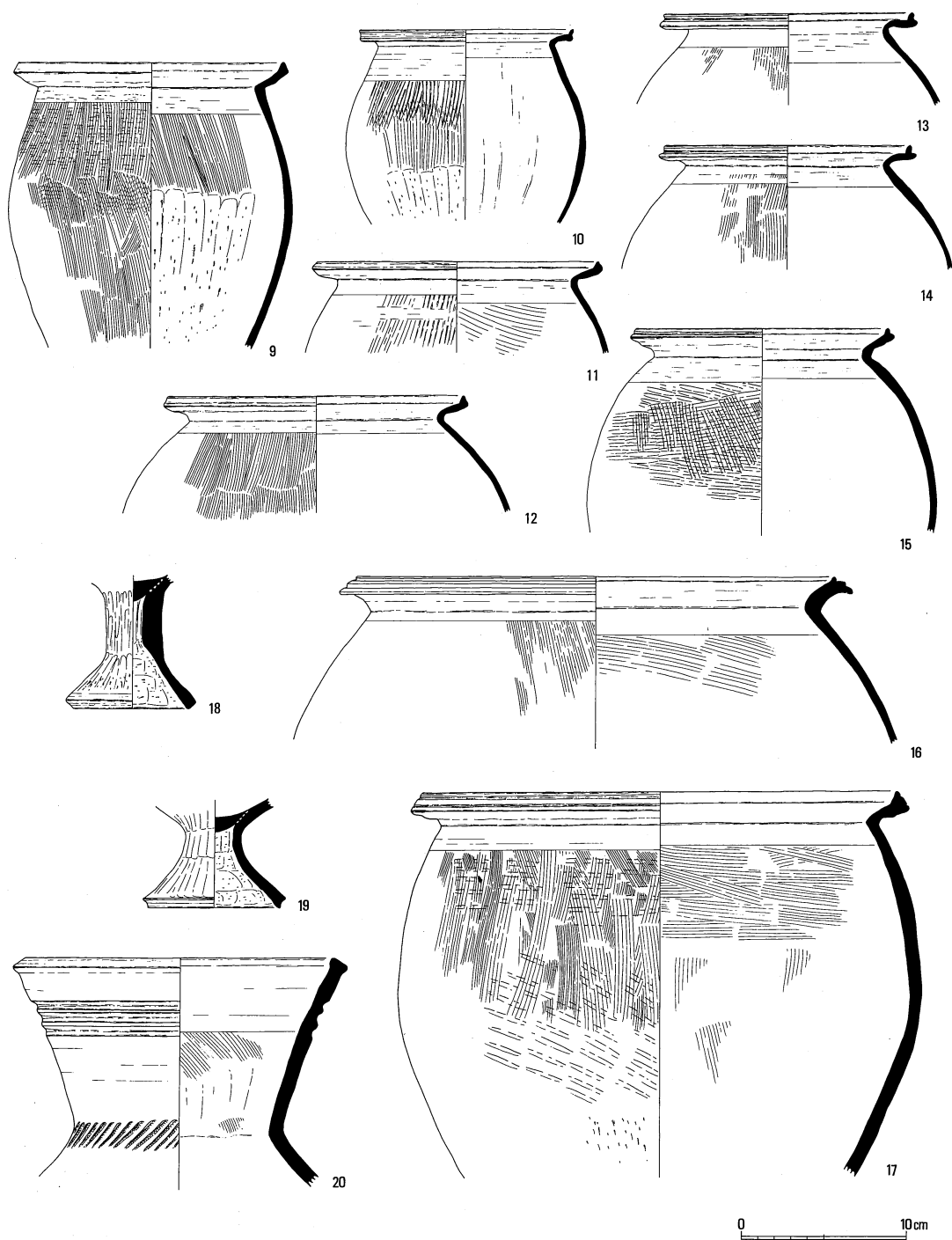
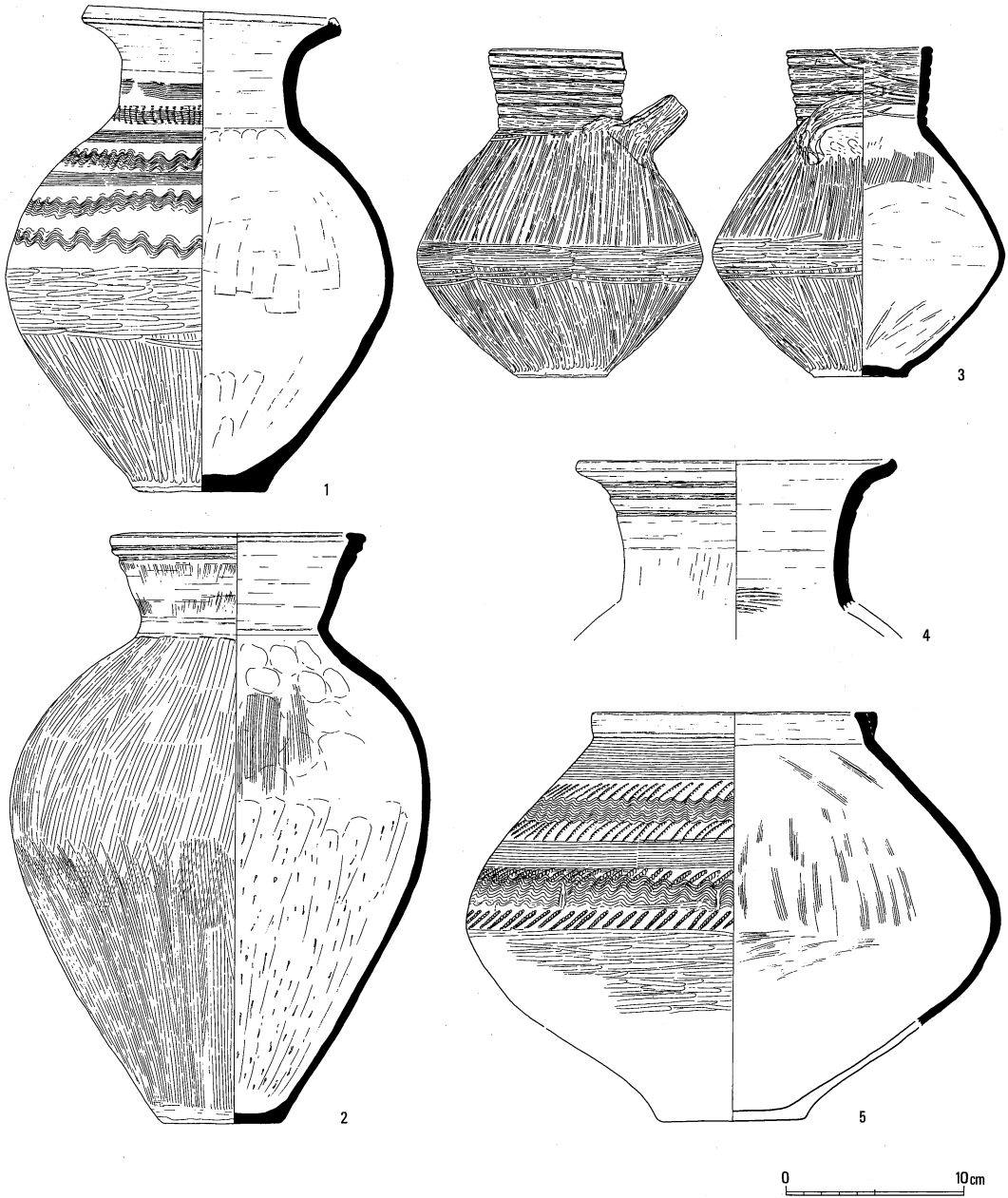


图8 井戸SE-18出土土器(S1/4)



- 黒粘Ⅰ 16, 17, 18
- 黒粘Ⅱ 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15
- 黒粘Ⅲ 6, 7, 8
- 黒粘Ⅳ 4, 5
- 黒粘Ⅴ 1, 2, 3

图9 井戸SE-21出土土器(S1/4)

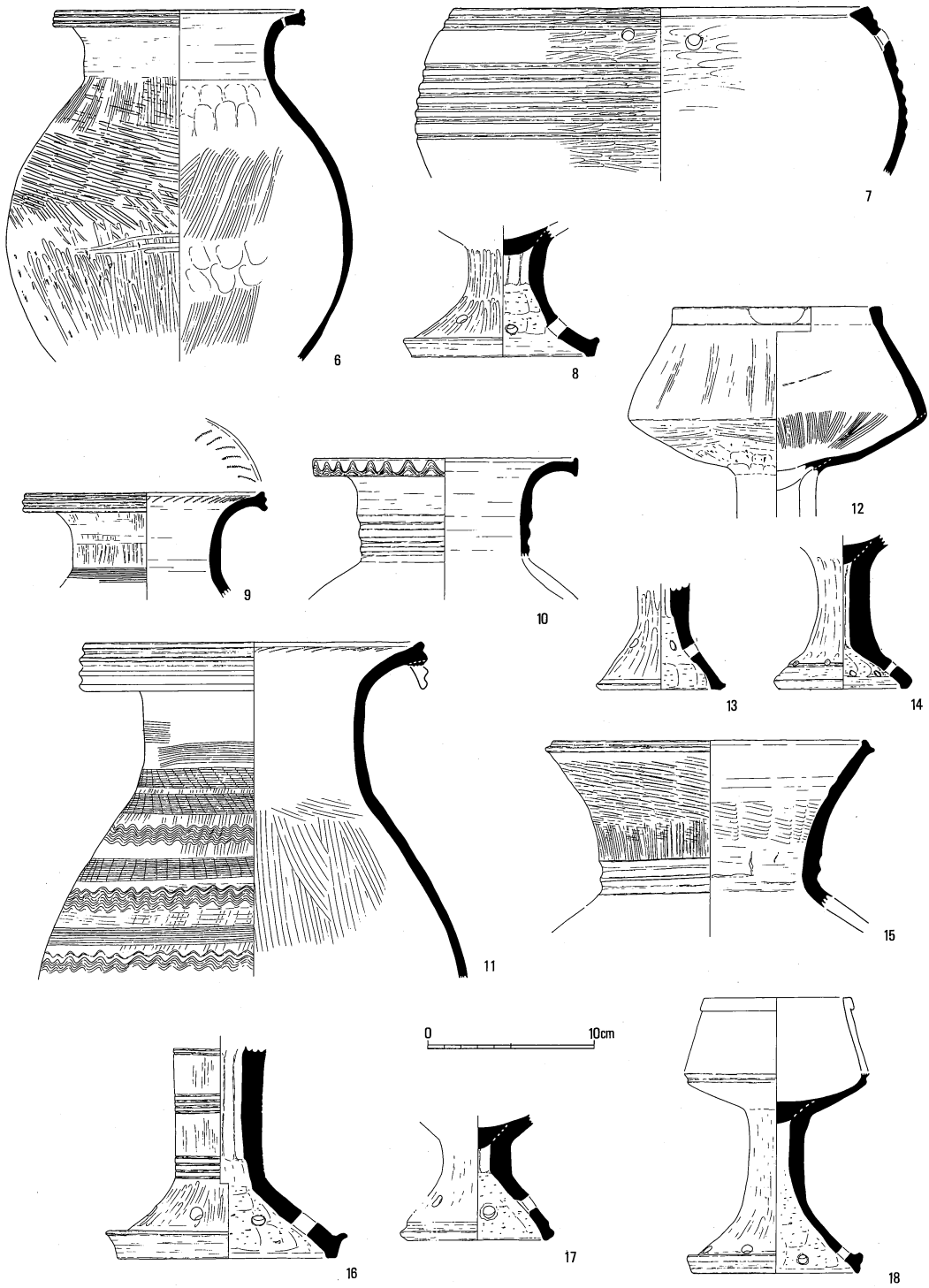


图10 井戸SE-21出土土器(S1/4)

(3) 古墳時代の遺構と遺物

1) 長寺1号墳

第8次調査区の南よりで検出した周濠状の遺構で、第4次調査で検出した古墳時代前期初頭（庄内期）の古墳跡につながる。遺構の規模は幅8m以上、深さ1.5mの逆台形状に掘り込み、調査区では北東・南西方向に延びている。周濠の下層には自然木や落葉を含む厚い植物層の堆積がみられ、古墳が築かれた後、墳丘やその周辺が樹木で覆われていた様子である。葺石などの落石は見られない。遺構の時期を決定できる土器類の資料が出土しておらず、第4次調査で検出した庄内期に並行する土器を指標にする他にない。周濠の最下層から木製農耕具が2点出土している。周濠の上層では奈良時代の瓦が廃棄されている。また長寺廃寺にともなう建物跡の柱穴を周濠の上面から検出している。

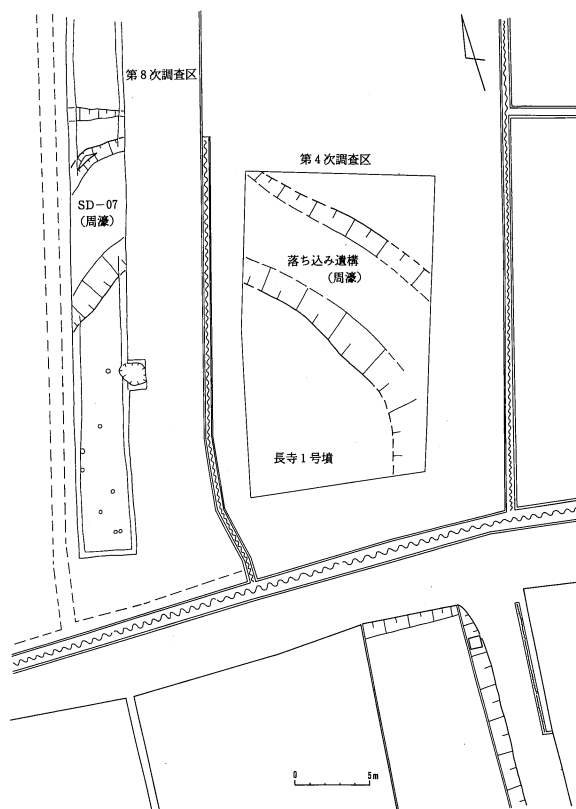


図11 長寺1号墳の調査全形図 (S 1/500)

ところで第4次調査では長寺1号墳を円墳と予測していた。しかし第8次調査で検出した周濠の輪郭を第4次調査の遺構と比較すると墳形にコーナ部の存在が指摘でき、むしろ方形に墳丘が区画されていることが判明した。よって一辺30mの方墳か創造をたくましくすれば前方部とも考えられる。

2) 長寺1号墳出土の木製農耕具について (名倉)

長寺1号墳の周濠からは2点の木製農耕具が出土した。図13-1は鋤身と柄とを一木で作り出し、刃先が分岐しない一木鋤Aである。柄は身の肩部中央からまっすぐ上にのび、把手部にいくにしたがい細くなる。肩部3.7cmから9.0cmにかけて半円形を呈する。しかし、他が円形ないしは楕円形であることと、横からの木目の観察から、ここも本来は円形状だったと思われる。身は長方形で肩部がなだらかに上がる。身の正面中央はゆるやかに隆起し、刃部及び側縁にいくにしたがい薄くなる。刃先の横断面は浅いU字状を呈する。柄と身がなす角度は180度で、現存長は87.6cm、そのうち身は長さ23.4cm、最大幅14.9cm、刃部厚0.9cmを測る。図13-2は身と柄とを別々に作る

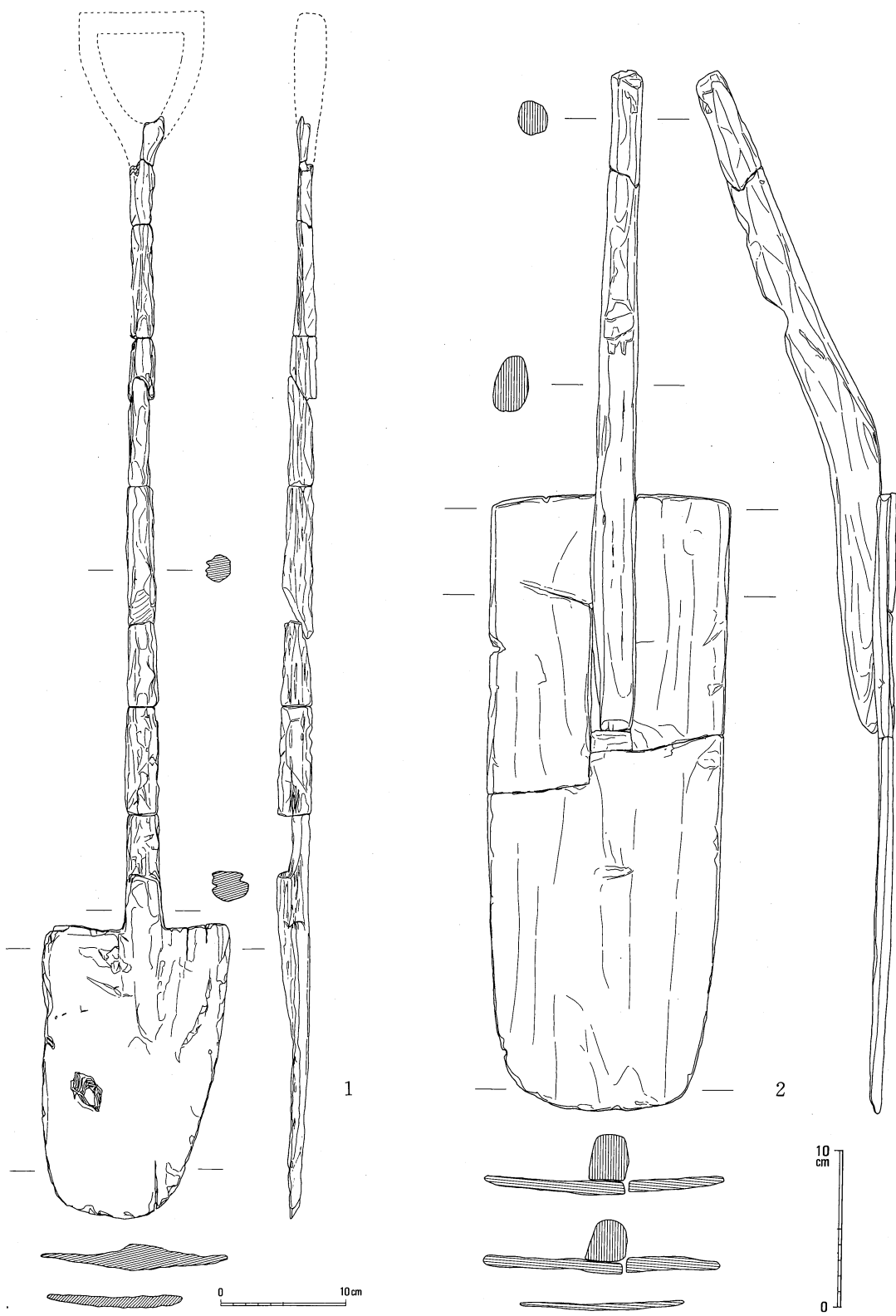


図13 長寺1号墳出土の木製農耕具 (1=S1/5, 2=S1/4)

組み合わせ鋤 B である。身は肩部と側縁が直線的で、刃部は丸くなる。身の全長は長く、全体的に弱く内湾する。肩部の中央から 6.9cm の所に長さ 7.9cm、幅 2.5cm の着柄にとまう長方形の孔があり、正面から背面に向かって約 47 度の傾斜で穿たれている。柄は途中で欠損しているが、把手部の方の横断面は円形で、先にいくにしたがいだんだんと太くなり、楕円形となる。先端より 19.5cm の所で浅いく字状に曲がり身と平行に組み合わせられる。身との接合部は柄の先端から長さ 7.8cm まで身と同じ厚みのある段を成形し、差し込みに対して面取り成形で仕上げている。ただ着柄が極めて貧弱であるため、使用に際しては他の部品で固定したと推測される。類例として入江内湖遺跡(行司町地区・古墳時代前期)出土の鋤がある。また民族例として江州鋤と形状に近い。身は現存長 39.6cm、最大幅 15.3cm、刃部厚 0.4cm、柄の現存長 43.5cm、同長径 3.6cm、同短径 2.3cm を測る。

3) 長寺 2 号墳

第 7 次調査区の南端から第 8 次調査区の北端にかけて検出した周濠だけを残す古墳の痕跡である。規模は一辺が 13m の方墳と考えられ、幅 4 m、検出した深さ 30~40cm で長寺 1 号墳に比較すると浅い。周濠には水溜まりを示す粘土層の堆積が見られず空堀りであったことが推測される。墳丘はすでに削平されて存在しないため埋葬施設については不明だが、周濠から関川編年による IV 期の円筒埴輪が出土しており古墳時代中期後半の古墳と判断される。

4) SD-19・20

第 8 次調査区の中央部で検出した幅 1.3~1.5m、検出した深さ 20~50cm の平行して南北に流れる溝である。溝の時期は定かでないが SD-19 から関川編年による V 期の埴輪片が局部的に出土しているため、おそらく古墳時代後期から長寺廃寺が創建されるまでの遺構と推測される。溝の性格は定かでないが、SD-19 に取り付いて円筒埴輪を暗渠排水管に転用した SD-22 が出土しており、排水施設が伴うなど集落や館に関わる遺構かもしれない。

5) SD-22・暗渠排水遺構

第 8 次調査区の中央部、SD-19 に取り付く状態で検出した幅 40~50cm、奥行き 2.60m の掘り方に円筒埴輪を長さ 2.1m にわたって排水管に転用した遺構である。排水管に転用された埴輪は 6 本でその内 III 期の朝顔形埴輪を排出口にして、IV 期で器高が低い円筒埴輪 4 本を奥に接続させ、排水入口には V 期の円筒埴輪 1 本を並べている。時期違いの埴輪をうまく転用していることから、おそらくは周辺にある古墳から埴輪を抜き取ったものと推測される。排水管が機能していた時期は SD-19 に伴い、古墳時代後期から長寺廃寺が創建されるまでの間と考えられる。遺構の性格は暗渠排水と思われるが、どのような役割で作られたのかわからない。

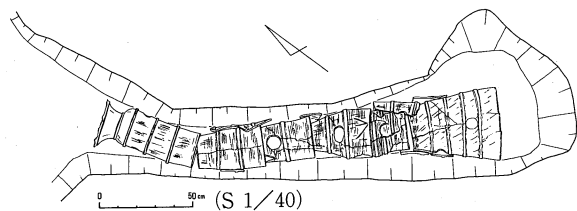


図 16 円筒埴輪を転用した排水遺構 (SD-22)

(4) 奈良～平安時代の遺構と遺物

1) SD-06・08

第8次調査区の中央部で検出した東西に流れる溝で、およそ3mの間隔を隔て2本の溝が南北に平行して掘り込まれている。北溝にあたるSD-06は幅2.5m、検出した深さ1mの比較的規模の大きい溝で、長寺2号墳の南側周濠を切り込んでいる。断面観察から再掘削による下層と上層、再掘削以前の最下層に大

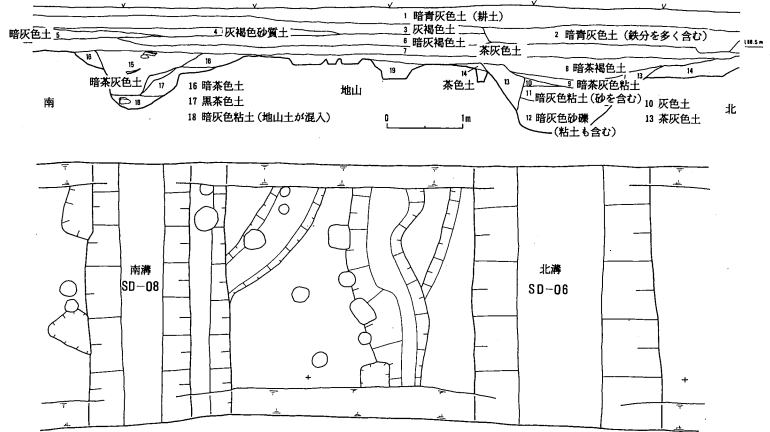


図14 長寺廃寺北辺の境界溝 (S1/100)

別でき、黒色土器A類碗や土師皿、土釜などが下層から出土し、軒平瓦の破片が溝の上層から多く出土している。10世紀頃には再掘削に伴う溝として機能していたものと推測される。最下層の時期は定かでない。南溝のSD-08は幅1.9m、検出した深さ80cmの溝で北溝に比べて規模が縮小している。SD-06と同様に再掘削を伴うが、当初は段堀り状で再掘削後は溝の形態や規模が縮小している。時期はSD-06と同じで、溝の上部から瓦片が多量に出土している。

SD-06・08は条里制に伴う五条五里22坪の中央部を東西に区画する溝で、条里制を意識した可能性が強い。また現状の地割りに遺構と見合う地形が残っている。溝から出土した土器は10世紀代で、溝はそれ以前から機能している。溝から瓦片が多数出土している。同溝を境に南側では包含層から出土する瓦類がめだつことなど長寺廃寺に伴う遺構であることが考えられる。よって同遺構は長寺の北辺を限る境界溝と思われる。おそらくは土塀のようなものを築き、その両側を区画した側溝と考えられる。

2) SD-07 上層遺構 (図12参照)

長寺1号墳の周濠上から柱穴遺構と溝状の遺構が出土している。柱穴遺構は一辺が50～60cmで方形に掘り込み、南北におよそ1.9mの間隔で柱2間が並ぶ。古墳の周濠が埋没した段階で建物を築いていたらしい。また柱穴には掘り方が異なる重複したものがあり、建て直しをしている。柱穴の基盤層にあたる長寺1号墳(SD-07)の上層には長寺廃寺に伴う瓦類が出土しており、柱穴の時期は長寺の創建期より時期が新しい。溝状遺構は柱穴遺構の北側に隣接して検出している。幅5mほど、検出した深さ30cmで東西に延びている。おそらくは柱穴遺構とともに北面を区画してい

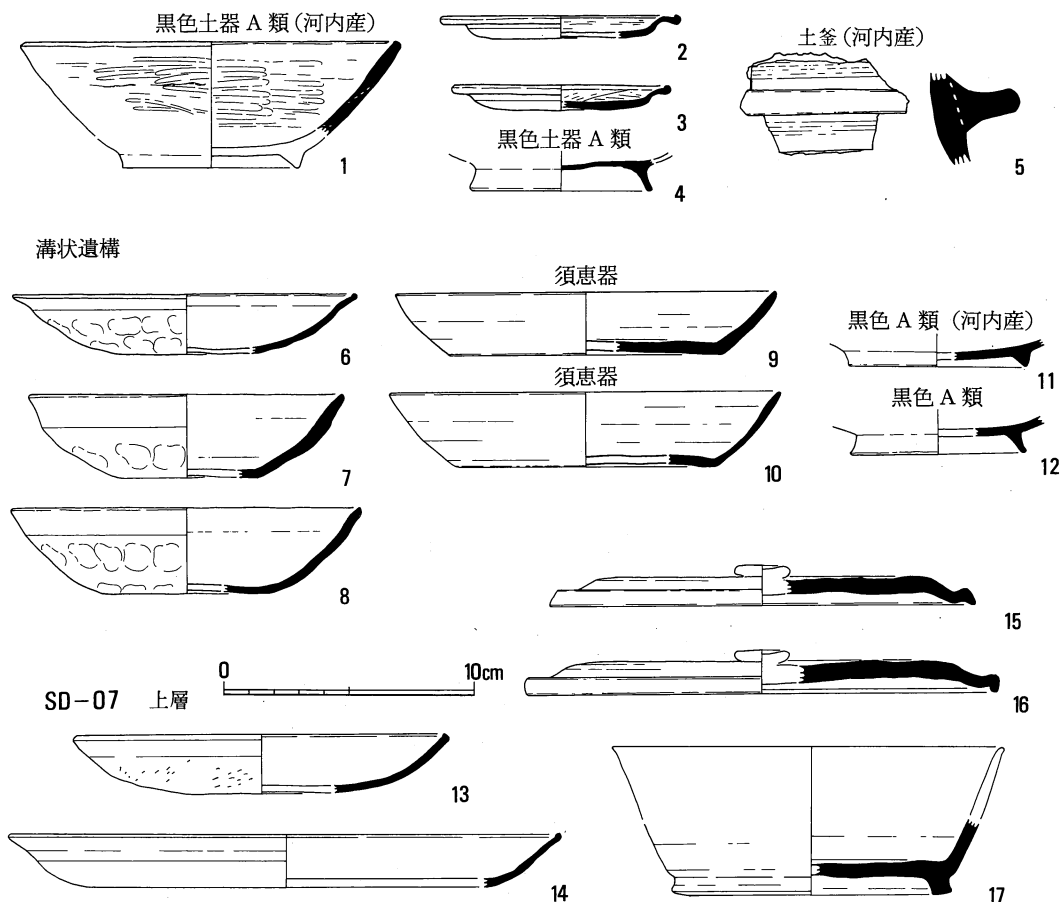


図 15 平安時代の土器 (S 1/3) 1~5・SD-06, 6~12・SD-07 溝状遺構 13~17・SD-07 上層
た遺構と推測される。同遺構から多量の瓦片とともに 9 世紀代の黒色土器 A 類を含む土器片が
出土している。

3) 池状遺構 (SX-01)

第 7 次調査区の北端部で検出した遺構である。一辺がおおよそ 5 m、深さ 30~50cm の隅丸方形の
落ち込みから谷筋へ延びる幅 30cm、深さ 30cm の溝が取り付く遺構である。落ち込みの北~東辺
にかけて葺石状の配石が遺存し、庭池の跡と推測される (図版 2)。また溝は池の排水を兼ねた暗渠
の痕跡と解される。時期は限定できる遺物が出土していないため遺構の時代を根拠づけるのが難し
いが、近接する第 3 次調査地点では平安時代の屋敷跡を検出しており、同屋敷に伴う庭池の可能性
が強い。

Ⅲ ま と め

(1) 弥生時代

第7次調査区では谷筋状の落ち込みを検出し、谷筋の両側に別れて中期後半の集落が広がっている。谷筋からは大和第Ⅳ様式の土器が出土する砂礫層が際立ち、比較的水量の豊かな川筋であったことがうかがえる。第8次調査区はその南側に広がるなだらかな台地上で中期後半（大和第Ⅳ様式）の住居跡の存在が推測される pit 群、小溝、井戸などを検出し、中期後半を主体とする集落の広がりが明らかになった。第1次調査以来、第8次調査にかけて約100m四方において調査区を設定してきたが、いずれも弥生時代中期後半の包含層が豊富で集落の中心部と解される。環濠など集落の規模や範囲を示すような遺構は依然、定かではない。ところで長寺遺跡に所在する弥生集落は中期末～後期の遺構が存在しない。中期末～後期の段階で集落が断絶している可能性が強い。同遺跡の東には高地性集落で知られる東大寺山遺跡があり、長寺遺跡の盛衰と関わりが興味深い。

(2) 古墳時代

第8次調査区で長寺1・2号墳を検出した。第7次調査区で検出した谷筋の南側に広がる台地上に築かれた古墳時代初頭と中期後半の古墳である。墳丘は削平され、周濠跡が残るのみである。第3・5次調査でも古墳跡を検出しており、長寺遺跡が古墳時代前期から後期前半にかけて古墳群を形成していた様子である。これまで東大寺山古墳群の展開を丘陵地帯でのみ考えられていたが、改めて丘陵裾の盆地部に広がる古墳群の存在がクローズアップされる。特に古墳時代前期初頭の段階に築かれた長寺1号墳は、東大寺山古墳群の形成が大和・柳本古墳群や纏向古墳群の出現と並行して始まっていたことを示し、同古墳群の歴史的な位置づけを検討する重要な資料である。

(3) 奈良～平安時代

1) 長寺廃寺

第1次調査で検出した規模の大きい掘立て柱遺構に続いて、第8次調査でも再び長寺廃寺に関わる遺構を検出した。遺構は寺院の北辺を限る東西方向に延びる2本の溝で、両溝の間に土塀のような境界が推測される。谷筋地形の南側に広がる台地部を利用して築いた寺院らしく、同地点にあった古墳を囲みながら寺域を形成していた可能性がある。また寺域を区画した北辺溝は10世紀頃まで機能しているが、中世の段階になると寺域が荒廃していた可能性がある。

2) 池状遺構

第7次調査区の北端で検出した平安時代の庭池跡は、第3次調査で確認している富豪層の屋敷に伴う遺構と考えられる。同時代には荘園領主に代わって農地を直接経営する富豪の輩と呼ばれた上層農民の存在が知られており、そうした階層の屋敷地に築かれた庭池と推測される。遺構には葺石が施されており、庭園を築いていた可能性がある。櫨荘遺跡と大和の荘園時代を考える興味深い資料である。

平等坊・岩室遺跡
(第10次調査)

I はじめに

平等坊・岩室遺跡は、天理市平等坊町および岩室町一帯に所在する弥生時代から近世に至るまで継続する複合集落遺跡である。地理的には、盆地東部山麓の谷筋から派生し市内の中央を西向きに流れる布留川により形成された扇状地形上に立地する。これまでの調査により、弥生時代の全期間にわたる多くの遺構と遺物が検出され、奈良盆地東部における拠点集落であることが認識されている。近年の第8次調査（平成3～4年度・天理市教委調査）では、調査期間・面積ともにこれまでにない大規模な調査であったため、弥生前期から後期の各時期の集落の周囲を巡る大溝群（環濠）の存在を確認し、集落の発展過程を把握し得るほどの成果が得られている。また、弥生集落廃絶後の土地利用の変遷が明確となり、飛鳥～奈良時代では、これまで未確認であった寺院跡の存在が想定されている。

今回の調査地では、同じ敷地の中で平成3年度に集合住宅建設に伴う遺構および遺物包含層の有無確認のための試掘調査を実施しており、その際に奈良後期～平安前期の遺物包含層を確認している。今回、当時の原因者から敷地南半分においての個人住宅建設に係る開発申請があり、その事前

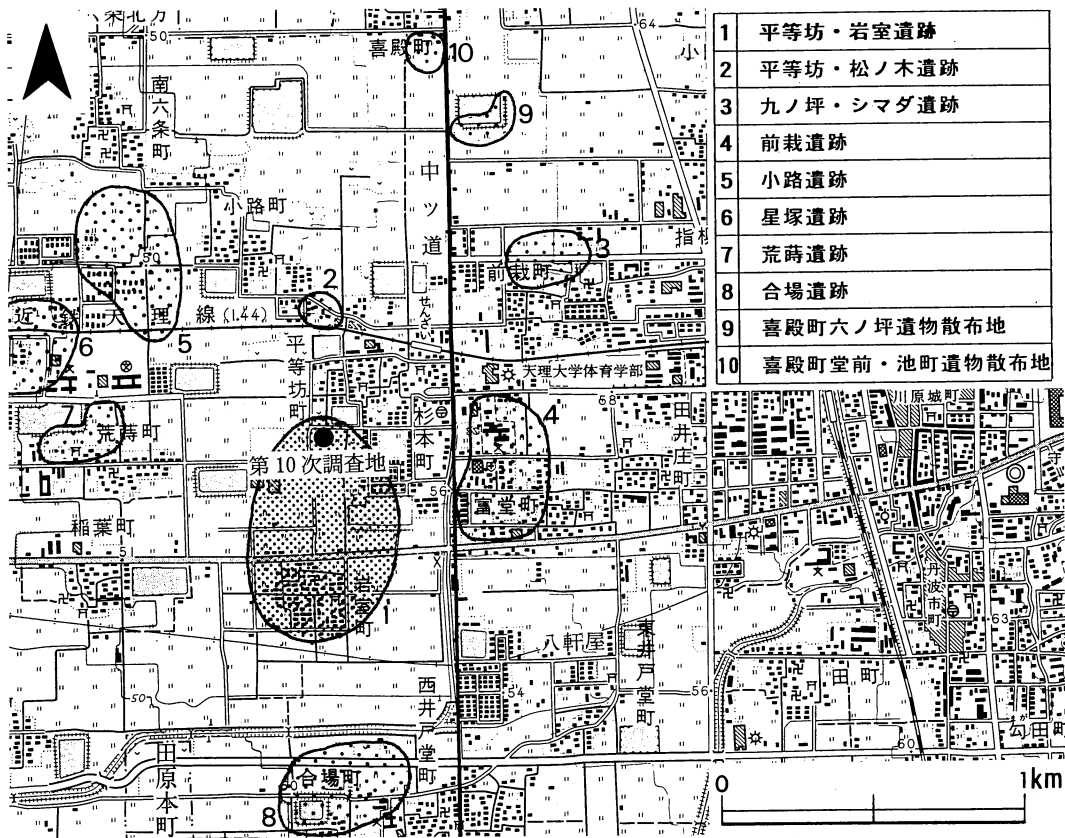


図1 平等坊・岩室遺跡と周辺の遺跡 (S=1/25000)

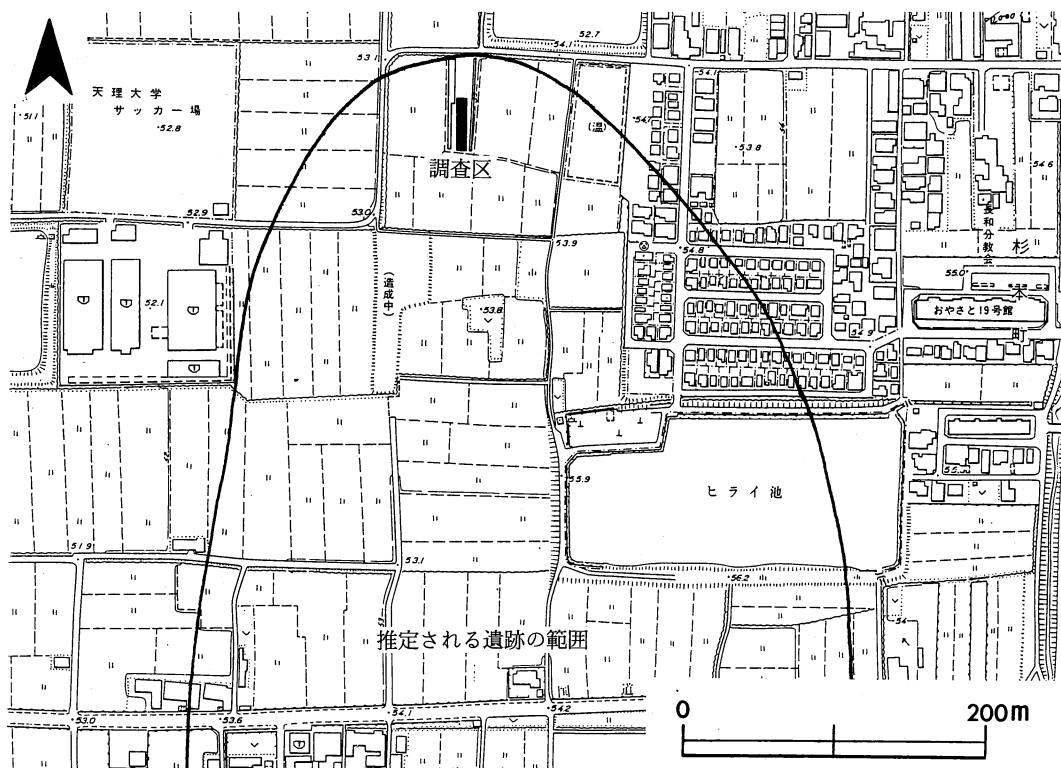


図2 調査区位置図 (S=1/5000)

の確認調査として当初より前述の寺院関連遺構の検出および弥生集落域の北限確認を目的とした発掘調査を実施することになった。

調査は平成4年12月3日より開始し、平成5年1月31日にすべての作業を終了した。調査面積は約238㎡であった。

II 調査の概要

1. 層序

当調査地における基本的な層序は、図3に示したような状況を呈する。現地表面下約40cmまでに耕作土(第Ⅰ層)、床土(第Ⅱ層)が続き、これら上部堆積層からは近世～近代の遺物がわずかに出土している。次に、中世の土器片をわずかに含む暗灰黄色砂質土(第Ⅲ層)が層厚20cm前後で堆積し、この層まではいずれも水平な堆積状況を呈していた。おそらく農地としての土地利用の上限を示すものと推定できよう。先述の第Ⅲ層より下位では、調査地の南部に傾斜をもって遺存する遺物包含層があり、上下2層に分層される。上部包含層(第Ⅳ層)は奈良～平安前期の瓦や土師器、須恵器、黒色土器等を含み、下部包含層(第Ⅴ層)には弥生中期の土器や石器類が微量に含まれ調査区の北半に部分的に分布する。さらに下層では、暗灰黄色砂混じり粘質土(第Ⅵ層)、灰色シルト質粘土(7.5Y 5/1 灰・図3で斜線で示した層：第Ⅶ層)の無遺物層が続く。

なお、今回検出した弥生前～後期、奈良～平安前期の遺構はいずれも第Ⅴ層～第Ⅶ層の上面で確

0. 盛土
 第I層：1. 耕作土
 第II層：2. 床土
 第III層：3. 2.5Y5/2 暗灰黄 砂質土

第IV層：4. 奈良～平安前記遺物包含層 10YR4/3 にぶい黄褐 砂質土（やや粘質）
 第V層：5. 弥生中期遺物包含層 10YR3/4 暗褐 砂質土（細砂を多く含む）
 第VI層：6. 2.5Y5/2 暗灰黄 砂混じり粘質土
 自然流路 NR-03：7. 10YR3/3 暗褐 暗褐砂混じり粘土（粗砂を多く含む）
 8. 10YR4/1 褐灰 中砂～粗砂（やや粘質）
 9. 10YR3/3 暗褐 砂混じり粘土

10. 10YR4/2 灰黄褐 砂混じり粘土
 11. 2.5Y4/1 黄灰 砂混じり粘土
 自然流路 NR-02：12. 2.5Y3/1 黒褐 細砂～粗砂

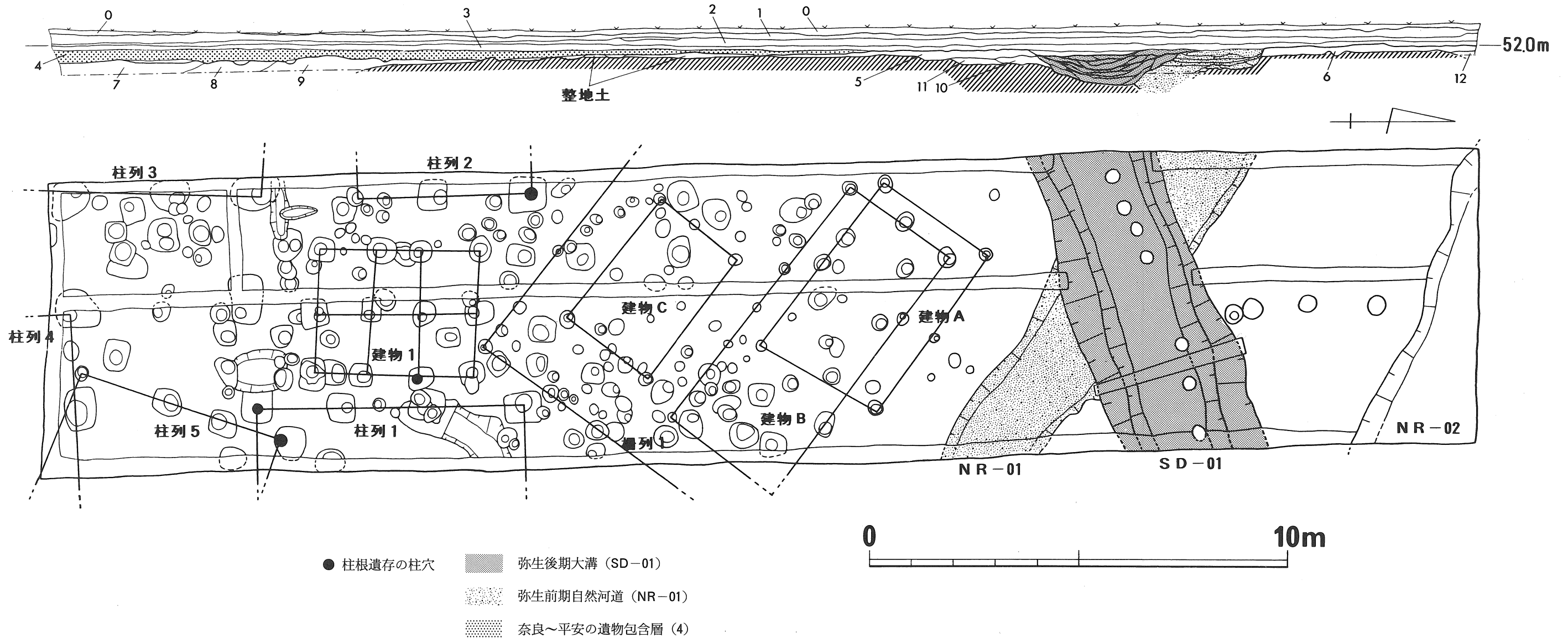


図3 調査区遺構平面図 (S=1/100)

認しており、後者の時期の遺構では一部整地土を介在した状況で検出することができた。

2. 検出遺構

今回の調査では、弥生前～後期の柱穴、溝、自然流路および奈良・平安前期の掘立柱建物等の遺構が検出されている。以下、各時期の遺構について概観する。

a. 弥生前～後期

自然流路 NR-01：調査区の北半を南東～北西方向に流れをもつ流路である。幅約2m、深さ約0.4～1mを測り、西側に向かうほど深くなっている。灰褐～灰白色のシルトと粗砂を基調とする堆積土の上半から弥生前期新段階の壺の口縁部から体部上半にかけての破片が一点出土しており流路埋没時期の一端が窺い知れる。

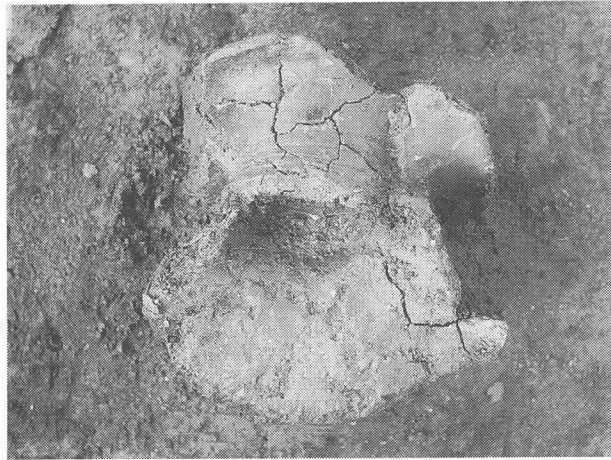


写真1 自然流路 NR-01 の土器出土状況（西から）

自然流路 NR-03：調査区南半を北西～南東にかけて蛇行して分布する。今回の調査では完掘していないが、西側延長部分を前年度の試掘時に確認しており、その際弥生中期の土器片や石器類が出土している。

建物 A・B・C および柵列 1：調査区中央の第Ⅶ層（地山）直上で検出された小穴群から数棟の建物および柵列を想定した。これらはすべて自然河道 NR-01 に主軸を同じくすることから河道の埋没時期の前後にその時期が考えられよう。小穴の埋土からは僅かながらも弥生土器の細片が出土しており、概ね弥生前期～中期初頭の居住空間が存在したと考えられる。また、南方で中期以降に埋没する自然河道 NR-03 も見られ、水利の便を考慮して居住域を設定していた様子が窺える。

溝 SD-01：自然流路 NR-01 埋没後に重複して掘削された大溝である。幅約3m前後、深さは約0.8mで、断面形状は逆台形を呈する。埋土より後期中葉～後葉の半完形土器群（図5-1～10）やサヌカイト製石器類がコンテナ3箱程の量で出土している。なお、溝底面直上の最下層では自然木や木の葉の堆積が認められた。

b. 奈良～平安前期

建物 1 および柱列 1～5：調査区の南半に集中して、掘立柱建物を形成する柱穴が多く認められた。第Ⅶ層およびその直上に部分的に残る整地土の上面で検出されており、これらの柱穴の中には柱材の遺存するものも含まれている。柱掘り方の平面形はいずれも隅丸方形を呈し、一辺が0.8～1.0m前後で深さも0.3～0.6mと様々である。復元可能な建物のみ図3に示したが、これらの柱穴の掘り方埋土からは概ね奈良末～平安初頭の土師器や須恵器の小片が出土している。2間×3間の総柱で柱穴底面に礎板を敷く建物1を除き、ほとんどが調査区外に伸びる建物の一辺である。いずれ

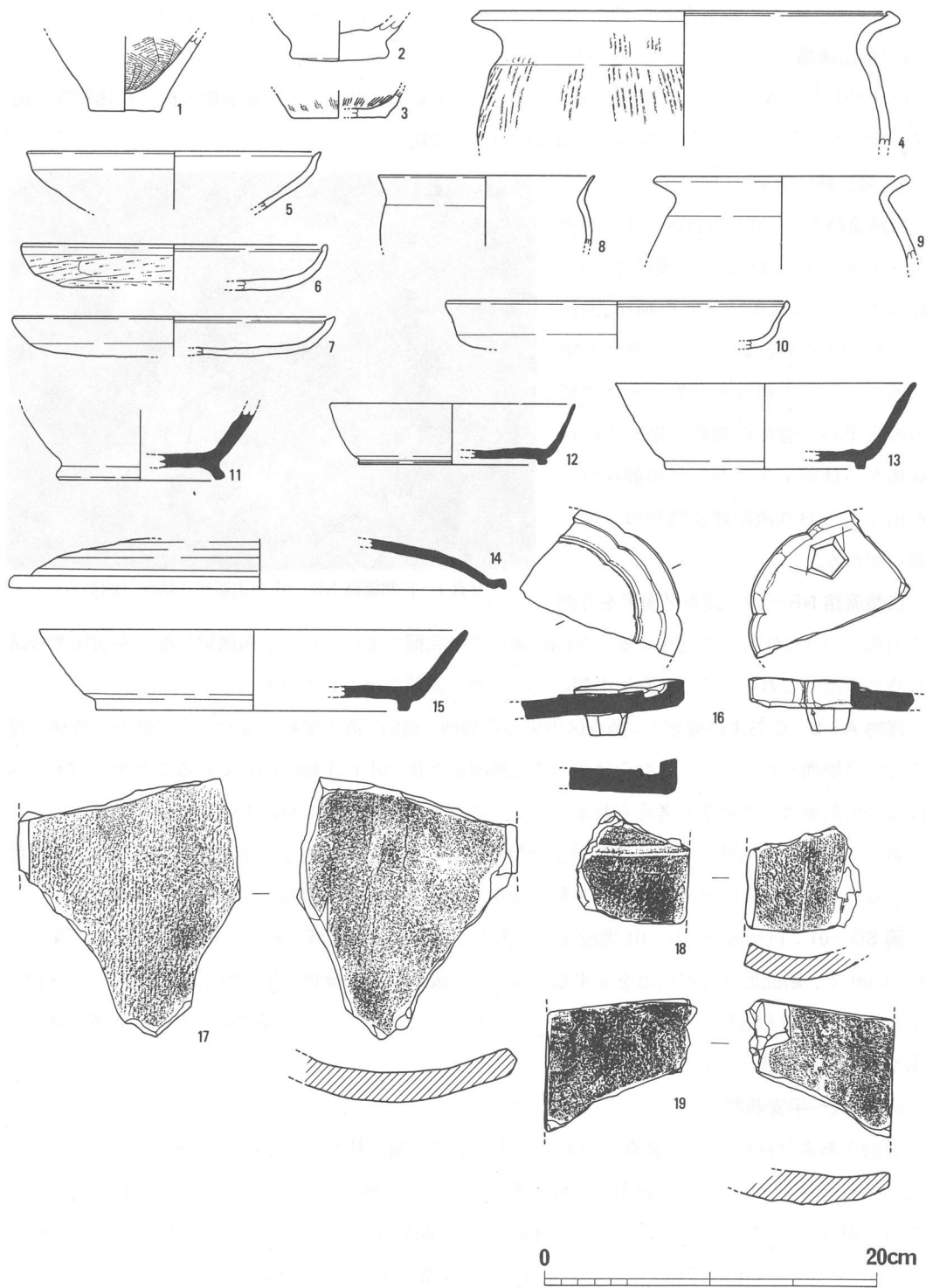


图4 包含層出土遺物実測図 (S=1/4)

も方格地割に基づいた建物主軸を取るが、一部に主軸方向の異なる建物も認められる。

3. 出土遺物

包含層出土遺物 (図4-1~19) : 第IV層より弥生中・後期の土器片、奈良~平安前期の土師器、須恵器、黒色土器A類、灰釉陶器、製塩土器等の土器類や平瓦、丸瓦等の瓦類が出土している。この中で特筆すべき遺物として八花硯(16)がある。この種の硯は、これまでに生産地である愛知県猿投山窯跡群を除いては平城宮、平城京、長岡京や興福寺、奥山久米寺などの宮、京域あるいは官寺のみに出土例が限られている(註)。この遺物により当該地が寺院あるいは官衙的な施設に相当することを想起させる。

弥生後期大溝 SD-01 出土土器 (図5-1~10) : 上層・中層・下層・最下層と4層に大別できる堆積土層のうち、上~下層より壺、甕、高杯、鉢等の土器類が出土している。上層の土器(1~4)は破片資料が主体的であり、中層の土器(5~9)に半完形のものが多く認められる。また下層では、紀伊系の受口口縁を呈する在地産の甕(10)が1点のみ出土している。これらの土器には弥生後期前葉~後葉の時期幅が認められ、集落の外縁を巡る環濠が北西方向に拡大する時期を示している。なお、最下層ではわずかに土器片が含まれるが量的には極めて少ない。

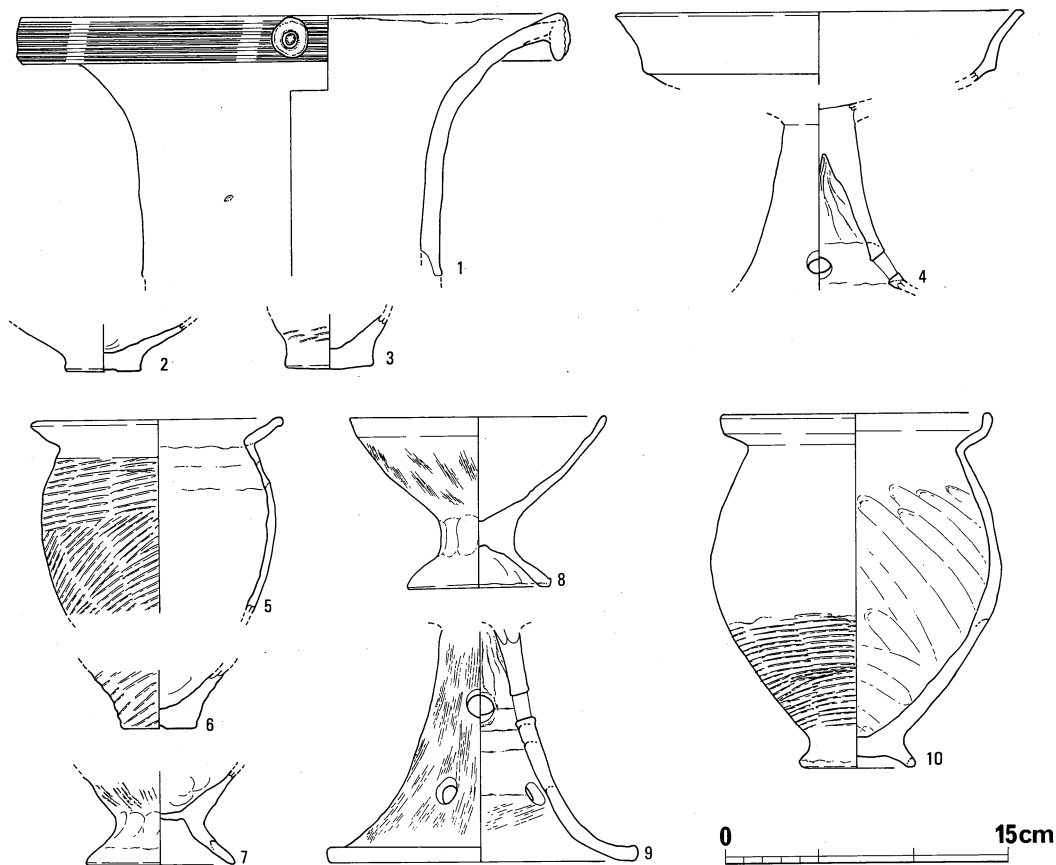


図5 弥生後期大溝 (SD-01) 出土土器実測図 (S=1/4)

Ⅲ ま と め

今回の第10次調査では、弥生前～後期および奈良～平安前期の遺構、遺物の存在を確認している。以下、当調査地における調査成果を文頭で述べた前年度の試掘結果および周辺における既往の調査成果と併せて各時期毎にまとめておく。

弥生前期：今回、新たに弥生前期の集落域の存在を追認した。これまでに当遺跡の推定範囲内では、東部中央から東側にかけて前期の遺物、遺構の存在が知られていたが、いずれも前期前半以降であり、第8次東調査区と第3次調査区では初現期の環濠を確認している。第10次調査で確認した集落域では、遺物の出土が少ないため断定できないが、前述の集落域よりも後出するものと考えられよう。また、建物や自然流路の南方にも中期に埋没する自然流路NR-03があり当時の自然環境から考えても狭小な範囲に限られた一次的な生活領域であると思われる。

弥生中期：第10次調査では、顕著な遺構は認められなかった。第8次西調査区検出の環濠帯の外縁に当たり、地形的にも居住不可能な低湿地であったためと考えられる。

弥生後期：前・中期の低湿地帯の埋没後に集落域を拡大した様子が窺える。中期末～後期初頭に降に北方への環濠の掘削が進み、後期前半期には多重環濠を形成していたと考えられる。

古墳前期～白鳳期：第10次調査地を含め、遺跡の北辺ではほとんど遺物、遺構は認められない。

奈良～平安前期：今回の調査で検出された掘立柱建物群と同時期あるいは以前に遡る時期の遺構を第8次調査区全域で確認しており、時期が下るに連れて想定される寺院関連遺構群の北方への拡張が考えられる。第10次調査では奈良後期以降の建物や特殊な遺物の出土が顕著であり、調査区の南半がそれらの北限を示している。また、東方に古代の官道である「中ツ道」があり、調査地の小字が「石バシ」といわれることから律令期の官道整備の頃に前後する時期で古代寺院もしくはそれに類する官衙的な施設の拡充がおこなわれたものと理解しておきたい。

註 異淳一郎氏（奈良国立文化財研究所）のご教示による。

No.	器種	調整手法	色調・胎土	焼成
1	壺	外 不明 内 不明	色調 7.5YR6/3 にぶい褐 胎土 やや密	やや軟
2	壺	外 タテヘラミガキ 内 板ナデ	色調 2.5Y7/2 灰黄 胎土 やや密	やや軟
3	壺	外 叩き目のちナデ 内 板ナデ	色調 10YR6/2 灰黄褐 胎土 密	やや軟
4	高杯	外 タテヘラミガキ 内 タテヘラミガキ	色調 10YR7/3 にぶい黄橙 胎土 密	良好
5	甕	外 叩き目 内 ナデ	色調 10YR7/3 にぶい黄橙 胎土 密	良好
6	甕	外 叩き目 内 板ナデ	色調 10YR7/3 にぶい黄橙 胎土 密	良好
7	台付鉢	外 粗いタテハケ 内 指頭ナデ	色調 2.5Y7/2 灰黄 胎土 密	良好
8	台付鉢	外 タテハケ 内 板ナデ	色調 10YR6/1 褐灰 胎土 やや粗	やや軟
9	高杯	外 ハケのちタテヘラミガキ 内 ナナメハケ	色調 10YR5/1 褐灰 胎土 やや密	やや軟
10	甕	外 ナデ 叩き目 内 指頭ナデ	色調 7.5YR5/3 にぶい褐 胎土 やや粗	やや軟

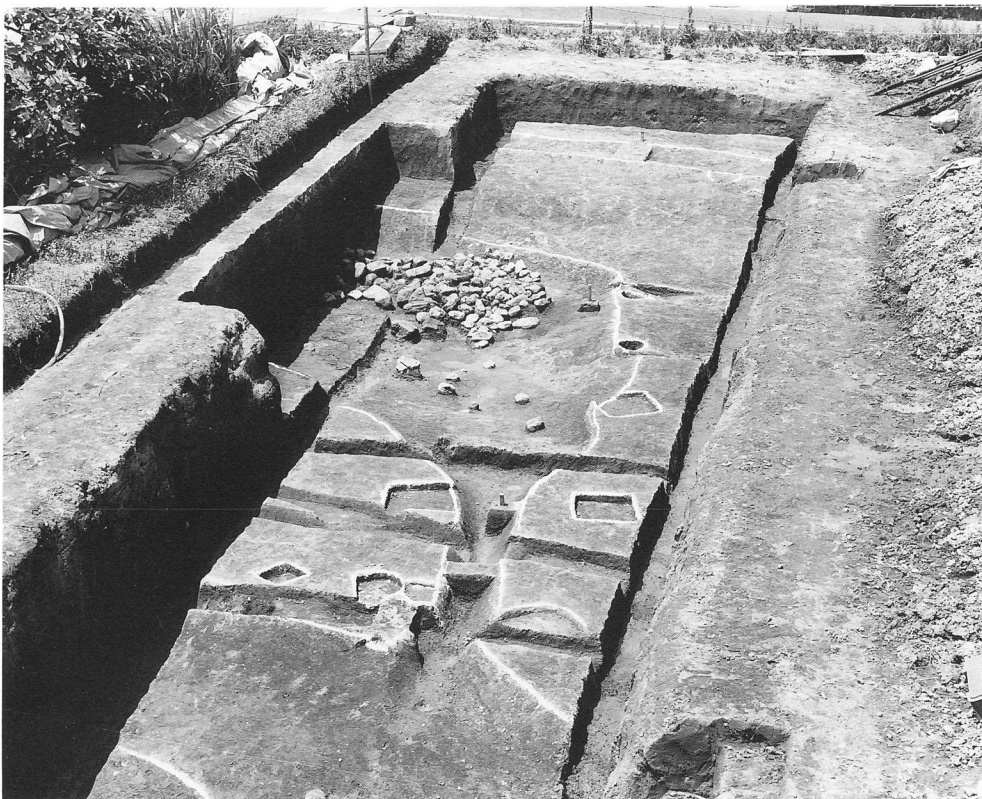
弥生後期大溝SD-01出土土器観察表



調査区全景(北から)



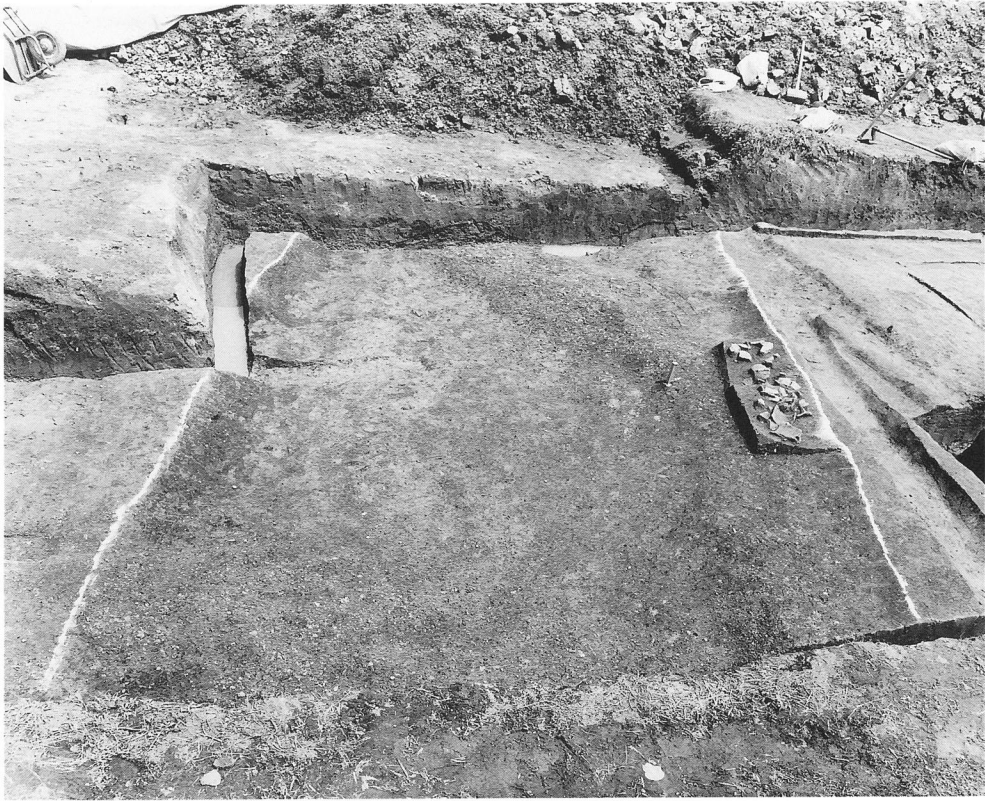
調査区全景(南から)



SX-01・池状遺構(南から)



SX-01・池状遺構(東から)



SD-05・長寺2号墳北堀(西から)

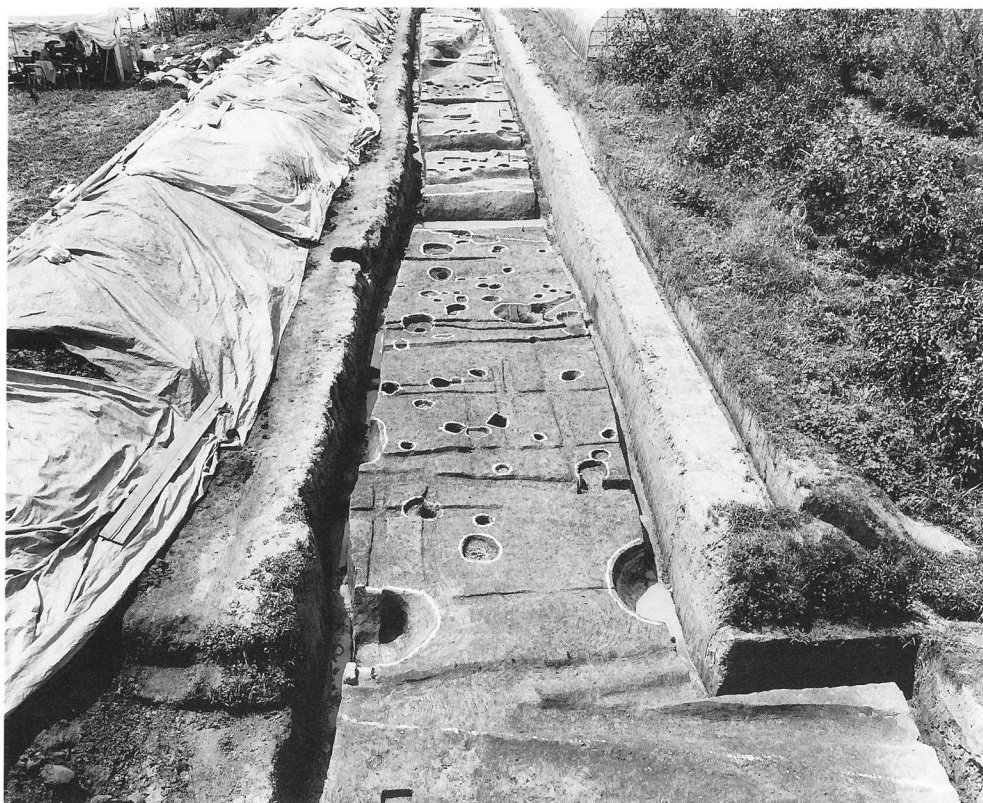


SD-02・自然流路(南から)

図版 4
長寺遺跡 (第8次)



調査区全景 (北から)



弥生時代・pit 群 (北から)



長寺廃寺北辺境界溝(左SD-08右SD-06)



SD-08からSD-19にかけての遺構(北から)



SD-07 上層遺構の柱穴（東から）



SD-07 溝状遺構の柱穴（南から）



SD-07・長寺1号墳周濠(北から)



SD-07・長寺1号墳周濠(北から)



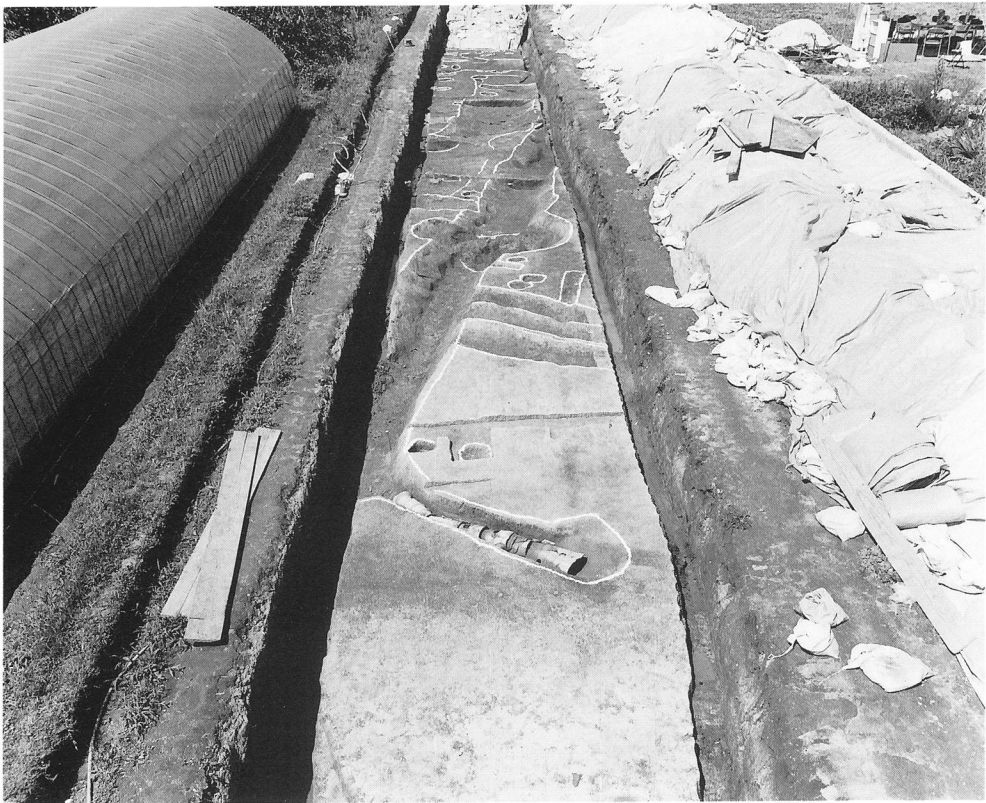
井戸 SE-18 (西から)



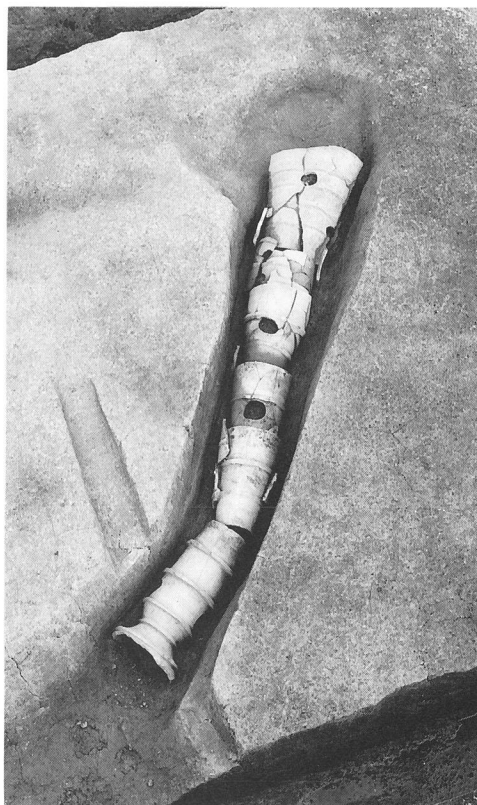
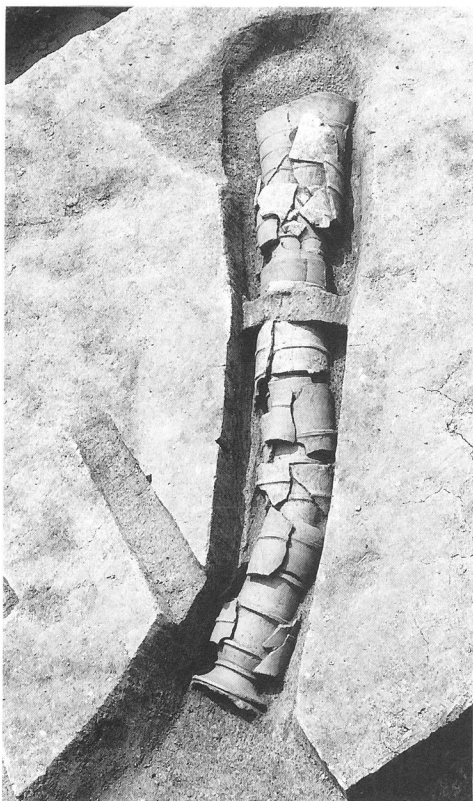
井戸 SE-21 (西から)



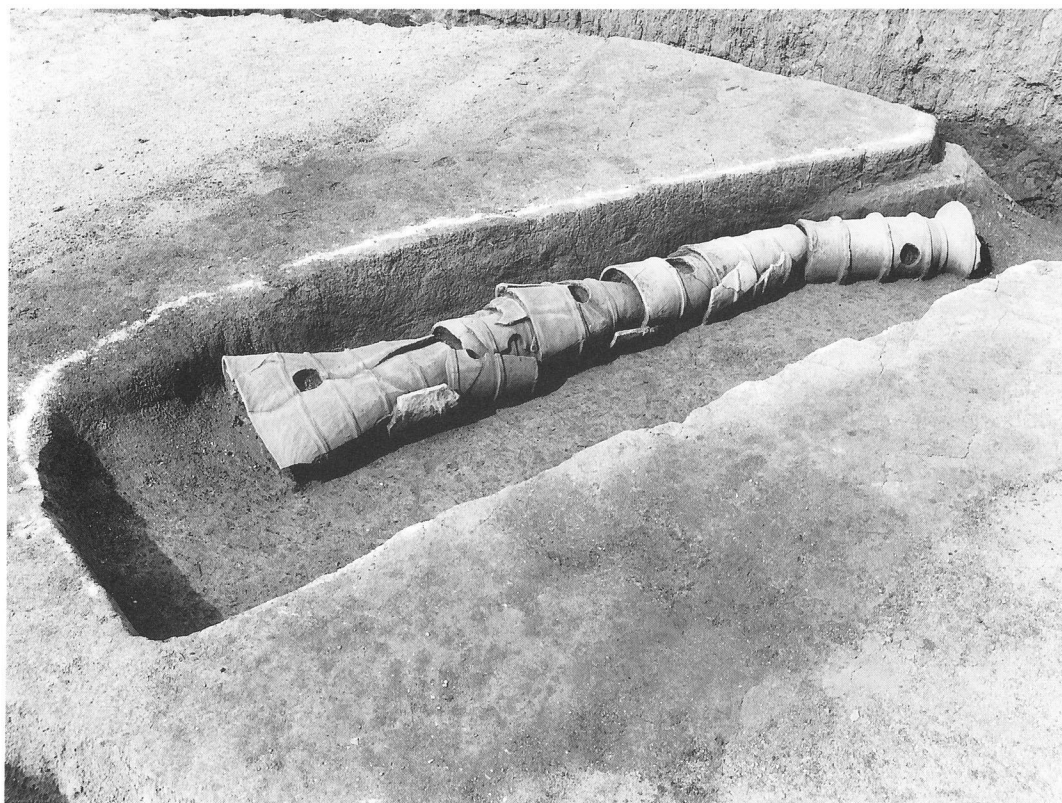
SD-19 古墳時代後期の溝(南から)



SD-19 と埴輪転用の排水管(南から)



SD-22・埴輪転用の暗渠排水遺構(西から)



暗渠排水遺構(北から)



西壁土層堆積状況
(東から)



弥生前期建物群
(南西から)



弥生前期自然流路 NR-01
および弥生後期大ミゾ
SD-01 (西から)



弥生後期大ミゾ SD-01
西壁土層断面 (東から)



掘立柱建物1
完掘状況 (西から)



建物1北西隅
柱穴の礎板 (西から)

平成5年3月

天理市埋蔵文化財調査概報

長寺遺跡（第7・8次）

平等坊・岩室遺跡（第10次）

発行 天理市教育委員会
編集 天理市川原城町605番地

印刷 天理時報社
天理市稲葉町80番地